

文學上楊雄の眞價值：論説

| | |
|-------------|---|
| 著者 | 兒島，献吉郎 |
| 雑誌名 | 龍南會雜誌 |
| 巻 | 8 1 |
| ページ | 1 - 8 |
| 発行年 | 1900-09-30 |
| その他の言語のタイトル | 文学上楊雄の眞価値：論説 |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/4986 |

龍南會雜誌第八拾壹號

論 說

文學上楊雄の眞價值

教授 兒島 献吉 郎

楊雄は前漢成帝以後に於ける一大宿儒なり、否彼は寧ろ前後漢四百年を通して屈指の大文學者なり、其學問、其文章、その思想、その品性、優に一世の學者を凌駕せるものあり、然るに後人或は彼の眞價を没却せんとして、漫に彼の品性及ひ其著作を非議するものあり、見よ宋儒程頤は彼を評して曼衍にまて斷無く、優柔にして決せずと曰ひしに非ずや、又蘇軾は彼を毀りて艱深の詞を以て淺易の説を飾ると曰ひえに非ずや、朱熹も亦通鑑綱目を作るに及ひ彼を貶して莽の太夫楊雄死せりと筆せり、凡へて是等の評或は彼の短所に中るものあるへしと雖も、予は寧ろ其筆誅の甚た苛刻なるを憾むなり、

當時彼が文學者として果して如何なる資格を有ちて、如何なる地位に立ちしかを察するに、彼の性質は恬淡にして寡欲なり、故に勢利、爵祿、功名、富貴、一とて彼の心志を奪ふ能はざりしなり、彼は唯文章を以て知己を百世に求めんと欲せざるものなり、故に家に儋石の儲なきも彼は常に晏如たりしなり、三朝に歷仕して一官に沈滞しながら彼は猶悠然たりしなり、これ彼が當時權門に阿附して家を起したる學者輩に比して截然一頭地を出したる所以なり、王莽の篡奪に及ひ始めて轉して大

夫と爲りしも、亦是れ耆老久次の故のみ、決して巧言令色の結果と見す做へからざるなり、論者或は其氣節廉隅なきを責むるものありと雖ども、是れ猶柳下惠を責むるに伯夷の清節なきを以てするか如きのみ、蓋し彼は政治家としては資格なきなり、道徳家としても亦缺點あるべし、然れども文學者としては當時洵に肩を比するものなきなり、顧ふに彼の文學的事業は彼が政治家的資格なきに由りて成功したるに非ざるか、彼が富貴に汲々たらず、貧賤に戚々たらずる讀書三昧的生活は、彼が廉隅的氣節なきに由りて實行されしに非ざるか、試に見よ彼の反離騷一篇は彼が屈原の文を愛慕仰式するの念より作りたるものなれども、其着想は反つて彼に反對したるものにて、江に投去身を湛むるの不可を叙へたるに非すや、然らば彼は決て血性的男子に非すて理性的人物たり、感情的詩人に非すて理論的學者たるを知るに足るへし』

彼は實に學者なり、詩人なり、文章家なり、當時の學者中彼に匹敵すべきものは僅に劉歆一人あるのみ、然れども歆は猶功名場裡の人にまて勢力に汲々たる迹あるなり、故に歆は平生彼を推尊せるにも拘らず、嘗て彼が念を勢力に絶ちて専ら意を玄理に致すの太た迂なるを誡め、彼の著作に就きて恐後人覆轡詭の批評を下せり、然るに彼は笑ひて之に應せざりを見れば、二人の意嚮の異なる所、果えて孰か高尚、孰か卑俗なるを知るに足らん、蓋し彼が富貴寵祿を浮雲視え、只管文筆を以て名を後世に成さんと夙期せたる所以は、彼が生來啗辯にまて口舌を以て一世を風靡せむること能はざるを知りてに非ざるか、猶司馬相如が口に啖にまて詞賦に達なりまて同一轍なり、然らば彼が巧言令色の人と伍え、阿諛逢迎の朝に立ちながら、能く特立獨行まて知己を百世の後に求めんとせたるは、固より彼の天分高さものあるに由れりと雖、抑亦彼の天稟短き所ありまが爲めに非さ

る。唯其口舌に短なりを爲めに、文筆に偏長を、學問熱心の極、富貴貧賤の何物たるを知らざりや、が如きは、是れ文學者とて最も取るべき資格なるに非ずや、

彼の學問は該博なり、彼の思想は深湛なり、彼は決て古人の奴隸と爲りて、章句訓詁の間に膠着するものに非ず、彼は古聖賢を我師友と爲て心交するものなり、然れども彼の文學上に於ける一生間の歴史は自ら詩人と哲學者との二様に別たれざるを得ず、蓋し彼の半生以上の歴史は詩人的境遇に在りしか、晩年に至りて翻然其宿志を變て哲學的研究に従事したるなり、顧ふに彼の四十歳以前、即ち彼が在郷の際には専ら力を詞賦に致し、大に司馬相如を欽仰し、務めて其風を摸倣したりしものゝ如し、其後京師に出遊するに及び、彼の文が相如に似たりとて、時の天子に薦むるものあり、因りて召されて待詔と爲れり、識らず彼は如何なる人に由りて推薦せられしか、又如何なる文章を作りて登庸せられしか、漢書楊雄傳の贊に由れば大司馬車騎將軍王音の推薦なるか如し、

楊雄傳贊云、雄年四十餘、自蜀來至游京師、大司馬車騎將軍王音奇其文雅、召以爲門下吏、薦雄待詔、

然れども王音は永始二年正月に死せし人なり、而て楊雄の待詔と爲りしは元延元年の末か、若くは同二年正月に在るなり、若し元延二年とすれば王音の死後四年なり、然れば雄を推薦せしものは必ず王音以外の人に在るへし、彼の晩年、劉歆に答へし書を見れば則ち班史の誤りを知るに足らん、荅劉歆書云雄始能艸文、先作縣邸銘王得頌、階闕銘及成都城四隅銘、蜀人有楊莊者爲郎、誦之于

成帝、成帝好之以爲似相如、雄遂以此得見、是に由りて觀れば雄は彼の同郷人にて、當時郎官たりしか、楊莊と曰へるものに由りて推薦せられし

か、又彼の作りたる成都城四隅銘等が相如の文に似たりとて登庸せられざるものなるか、出雲の人桃白鹿は雄か王音に推薦されたとて雄の待詔と爲りたる鴻嘉永始の間に在るへまど爲し、遂に又推論えて雄の死せまは王莽の篡立以前に在りと斷定まて、劇秦美新は雄の筆に非すと曰へり、是れ畢竟答劉歆書一篇を見ざるよりまて、此の如き空論を構成またるのみ、

雄嘗て帝に従ひ甘泉に赴き、還りて甘泉の賦を奏ま規諫の意を致せり、時に元延二年正月なり、然るに劉歆の七略に『甘泉賦永始三年正月待詔臣雄上』と曰へり、唐の李善は漢書に据りて七略の誤りを正まて曰はく永始三年甘泉行幸のこと漢書に見えず、疑ふらくは永始四年の誤なるへまど、七略の誤謬は李善既に之を辯せり、然れども李善亦誤謬なきに非ず、漢書成帝本紀を閲するに永始四年正月甘泉行幸のこと、及び三月河東行幸のことは並に其事を録せり、然れども同年中に十二月羽獵の記事無き、雄の自序傳に据れば甘泉、河東、羽獵の三賦は皆同一年間の作にまて、獨り長楊賦は其明年に作りたるや明かなり、然るに李善は甘泉を永始四年と爲し、長楊賦を元延二年と爲せり、其間相距ること二年なり、是れ雄の自序に符合せざる所あるなり、況や七略に長楊賦を以て綏和元年に作りと曰ふに於てをや故に余は甘泉、河東、羽獵の三賦は皆元延二年に作り、長楊賦は其翌年に作りたるものと爲すなり、試に成帝本紀元延二年の記事を見るに

元延二年春正月行幸甘泉郊泰畤、(即ち甘泉賦)

三月行幸河東祠后土、(即ち河東賦)

冬行幸長楊宮、從胡客、大校獵、(即ち羽獵賦)

此の事實及び其時月は雄の自叙傳に記するものと相符合せり、故に甘泉賦は永始四年行幸の時に成

りたるもの非ずして、元延二年行幸の時に作りたるや必せり、唯元延三年に胡人をきて長楊宮裡射熊館に禽獸を手搏せまひること本紀中に見ゆすと雖も、こは全く班史の疎略ならん、宋の司馬光、及び朱熹皆長楊賦中の事實を以て元延三年の欄内に入れたり、亦以て吾説の空疎ならざるを證するに足るへし、又桓譚の新論に雄は甘泉の賦を作りて翌日遂に死せりと云へり、

新論云雄作甘泉賦一首始成、夢腸出收而内之、明日遂卒、

潜の何焯の其妄を辯するや、先づ我心を獲たり、

何焯曰甘泉作於成帝時、安得腸出遂卒之事、楊子雲桓君山同時人、不應作此語、然則爲妄人附益者多矣、非新論本書然也、

甘泉行幸の後二月帝、后土を祭らんとて、群臣を率い河東に幸し、遂に西嶽に陟り、八荒を望み、悄然として殷周の墟を追跡し、眇然とて唐虞の風を懷ひたりしかば、雄乃ち還りて河東賦を上り、川に臨み魚を羨ひは歸りて網を結ふに如かざるの諷意を致せり、其年十二月又帝に従ひ羽獵するに及ひ、羽獵賦を奏して侈靡泰奢決して堯舜成湯文王三軀の意に非ざるを諷し、郎官に除せらる、明年秋帝胡人に誇視するに禽獸多きを以てせんと欲し、四方に命じて熊羆虎豹狐兔麋鹿等を長楊宮裡に輸送せしめ、胡人をして之を手搏し、各自ら其獲たる所のものを取り去らしむ、雄乃ち長楊賦を上りて農民收斂を得ざるの意を諷せり、蓋し彼の意に謂へらく賦とは風なり、類を推え辭を修め瑰麗閎衍の中に風喻規箴の意を致し、讀者をして覺えず識らず正道に復歸せまひるに在りと、是れ彼か詞賦を作るに就ての目的なり、然れども詩人どて彼の手腕は到底司馬相如の右に出づること能はざりぞ、言を換へて評すれば彼は結局司馬相如の軌轍以外に一步を踏み出すこと能はざりぞなり、

顧ふに彼の相如に於けるや葵藿傾仰の情一日のことに非ざるべし、彼は蜀郡成都に生れたるものなり、相如も亦成都の人なり、而て雄の生れまは相如の死後僅に五六十年なれば、其流風逸事必す父老の口碑に傳稱せられ、後進の腦裡に感染せるものあるへし、況や雄の天稟最も相如に近きものあるに於てをや、已に屢其人の性行を耳にまゝ、又其人の文辭を讀むに至らは、彼の中心必ず鼓舞興起まて自ら禁すること能はざりまならん、蓋し文筆を以て名を百世に成さんとの彼の素望は必す此の時に於て起りまものなるへし、宜なるかな彼の一生間の歴史は殆ど相如の歴史を繰返したるものに似たり、見よ彼か成都城四隅銘に由りて登庸されまは相如か子虛賦を以て登用されまと同じく、彼か羽獵賦を奏まて郎と爲りまは相如か上林賦を以て郎と爲りまと同じく、又彼の晩年劇秦美新の封事を上りまは相如の死後封禪の遺札を奏したると同一轍なるを、蓋し先入は主と爲り易し、況や幼時の感染に於てをや、宜なるかな彼の眼中唯一の相如あるのみ、故に彼は相如の賦を模擬するを以て能事畢れりと爲し、相如の文に形似するを以て無上の名譽と爲すものゝ如し、試に見よ彼の甘泉賦は相如の大人賦を規模し、羽獵賦は上林賦を摸倣し、長楊賦は子虛賦に胚胎を解嘲は難蜀父老の風格を學び、劇秦美新は封禪文の意向を取りしに非ずや、然れども若し彼と相如とを比較すれば相如の賦は瑰麗の裡に俊爽の氣を帶ひたりと雖も雄の賦は瞻麗の裏に奇峭の態を具へり、相如の賦は語意宏肆にまて縱橫馳騁の妙ありと雖も雄の賦は步趨緊束にまて鍛鍊彫琢の工あり、相如は滄海の汪洋たるに比すれば雄は崇岡の遶遶たるに比すへし、前者は縹緲として風に御する趣ありと雖も、後者は幽鬱にまて林に入る觀あり、故に雄亦嘗て相如の賦を稱まて人間より生ま來れるものに似すと曰へり、知言と謂ふへきなり、

答植譚書云、長卿賦不似從人間來、其神化所至耶、

蓋天縱の秀才と神化の靈筆とは、相如の獨得に於て實に千古の絕技なり、試に相如の子虛賦を見よ、子虛と烏有との應答は、大に齊楚の策士縱橫の氣習を見は、之、兩々頤頤、之、機先を制、之、敵墨を摩するの妙、實に人を於て三讀尚ほ厭はざらしむるに非ずや、又試に雄の長楊賦を見よ、其辭修らざるに非ず、唯其氣揚らざるを奈何せん、其理足らざるに非ず、唯其神飛動せざるを奈何せん、故に其子墨と翰林との問答は趣味蕭索、讀者を於て却つて繁縟を厭はまじ、之を子虛烏有の問答に比すれば其體裁相近と雖も、其風姿大に異れり、孫月峰、何義門等皆此賦を以て難蜀父老に摸擬するものと爲せり、蓋し自家の主意を言外に發揮するの工夫相似たるを以てならん、見よ長楊賦に於ける雄の本意は翰林主人の言に非ず、反つて子墨客卿に在るを、是の工夫は猶ほ難蜀父老に於て相如の本旨が却て彼自身の言外に在るか如きなり、且長楊賦中の

翰林主人曰、吁、客何謂茲邪、若客所謂、其一、未睹其二、見其外、不識其內也、僕嘗僊談、不能一二其詳、請略舉其凡、

是等の語句恰も難蜀父老中の

使者曰、烏謂此乎、必若所云、則是蜀不變服、而巴不化俗也、僕嘗惡聞若說、然斯事體大、固非觀者之所觀也、余之行急、其詳不可得聞、已、請爲大夫粗陳其略、

と相似たる所あるなり、然れども難蜀父老は元と散文に於て一種の客難的文體の祖を成せるものなり、而て賦とての問答辯難體は屈原宋玉已に其範を開き、賈誼及び相如等皆其風を襲へり、是れ雄の必ず規摸せんと欲する所なるへし、故に長楊賦は意匠より曰は、難蜀父老に擬したりと謂ふ

へきも、體裁より言はゞ子虛賦より取りたるものと謂ふべし、而て解嘲解難二篇は皆其体を難蜀父老に取りたるものなるへし、故に子虛賦中の

齊王曰雖然略以子之所聞見而言之、僕對曰唯々、臣聞楚有七澤嘗見其一、未覩其餘也、臣之所見、蓋特其小小者耳、

は長楊賦の知其一未睹其二也、僕嘗倦談、不能一二其詳、略舉其凡と同一調ならずや、且篇中或は韻を押し、或は押さゝる處あるも、亦法を子虛賦に取りたるものに非らざるか (未完)

本邦工業振興策

中 隈 伊 勢 吉

はまがき

あはれ、今年は我が爲にはいかなる厄年なりけん、みな月の十九日、ふと心地あしく、熱氣さしたりけるが、何事にやと思ひの外、たい重りゆく心地のみまされば、醫師に問へば、ひたすら病院にゆけよとすゝむ。さはいへ旅の空の便なさ、只朋友のかひなくまき助けによりて、此田舎男がかつてえ知らざりまねもごろの介抱を受けることゝなりぬ、

さて其頃は、五月雨の、あさてことしの雨空、あけくれ篠を乱す如くにて、庭の木艸も雨にまばみ、病の床もいどゝ露けく、濟々曇の時うつ鐘も、内ほのぐらければ、たい晚鐘の聲かどあやまたれて、わびしさいはんかたなし。思へば今日此頃は、學年試験の最中、人々のいとまみもさ